

1. 科研費ニュース

令和5(2023)年度 東京未来大学の科研費採択状況(表1)とテーマ(表2)は以下のとおりです。令和2年(2020)年度から今年度(2023)までの4年間の採択状況の推移(図1)から、総じて、基盤研究(C)の採択件数が多い傾向にあります。

表1 令和5(2023)年度 科研費採択状況

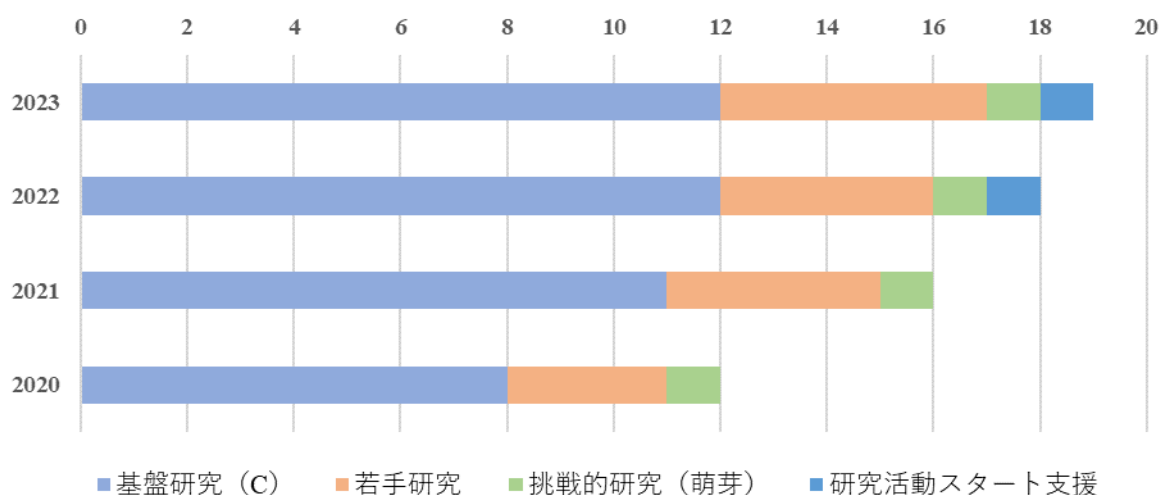
	件数	金額(円)	備考
基盤研究(C)	12	26,790,000	新規1件,平成30(2018)年度以降継続11件
若手研究	5	16,920,000	新規2件,平成30(2018)年度以降継続3件
挑戦的研究(萌芽)	1	4,300,000	平成30(2018)年度より継続
研究活動スタート支援	1	2,200,000	令和4(2022)年度より継続
合計	19	50,210,000	

注)金額は直接経費

表2 令和5(2023)年度 科研費採択テーマ一覧 *2023年度新規採択

基盤研究(C)		
藤後 悦子	発達に課題がある子どもへのチームスポーツ指導プログラムの開発とその評価	(共同研究者) 大橋 恵 井梅 由美子
鈴木 哲也	学校における動物飼育の歴史的・倫理的・法的課題と展望	
横地 早和子	芸術創作プロセスにおけるずらしと省察の関係からみる創造的な熟達過程の解明	
大橋 恵	青少年期のスポーツ経験による潜在的スポーツ観の違い	
川口 めぐみ	大人の言語刺激がこどもの行動形成に与える影響—0歳から5歳の発達段階と行動分析—	
高橋 文子	教師教育における「芸術知」の方法論的解明—表象と感性の融合を図るプログラム開発—	
大橋 智	児童生徒の個に応じた学びを実現する遠隔通信技術を用いたアウトリーチの社会実装	
白石 雅紀	日本におけるマイノリティ集団間の複合と相克に関する当事者団体からの聞き取り研究	
山崎 善弘	姫路藩木綿専売制の実現過程と歴史的意義に関する総体的研究	
金塚 基	高等学校における応援部の活動役割を通じた教育機能の展開及び集団文化の再生産	
大内 善広	父親の主體的な育児関与への動機づけを促す父親教室の参加経験に関する効果の検討	野澤 義隆
* 西村 実穂	水害発生時における保育施設利用者の安全確保および保育機能維持に関する研究	
若手研究		
埴田 健司	風評被害の維持・抑止に関わる心的メカニズムの検討	
仲嶺 真	成人期未婚者のライフコースにおける恋愛の位置づけと支援可能性の検討	
大村 美菜子	産後女性の化粧行為による機能変化	
* 橋元 知子	幼稚園の英語イマージョンクラスにおいて幼児の英語発話を促す要因と環境とは	
* 野中 俊介	ひきこもり機能の個人差が生活の質や社会的交流行動の改善プロセスに及ぼす影響	
挑戦的(萌芽)		
日向野 智子	潜在保育士の保育士就労促進に対する職場の人間関係と社会的スキルトレーニングの効果	磯 友輝子 藤後 悦子 角山 剛 高橋 一公 山極 和佳
研究活動スタート支援		
中澤 純一	「多様性の尊重」と「社会正義の実現」を視点とした多文化教育の教材開発	

図1 令和2（2020）年度からの採択状況の推移（件数）



2. 令和5（2023）年度 新規科研費採択者の研究紹介

今年度、科研費を新規で採択された3名の先生の研究テーマと内容をご紹介します。

こども心理学部 西村 実穂

Q1 採択された研究テーマと概要、具体的研究方法や研究計画について教えてください。

研究テーマは「水害発生時における保育施設利用者の安全確保および保育機能維持に関する研究」です。

近年、毎年のように豪雨災害が多発しており、浸水被害を受ける保育所・幼稚園・認定こども園（以下、保育施設とします）が多くなっています。規模の大きい豪雨災害では、30ヶ所もの保育施設が浸水被害を受けたこともあります。気象変動による線状降水帯発生、台風の進路変更や線状降水帯の発生によって、これまで被害の生じにくかった地域でも浸水被害が生じるようになってきたこともあり、保育施設における豪雨災害への備えは欠かせません。しかし、これまで保育施設の災害対応は避難・引き渡しまでの想定が主となっており、保育再開までの過程の見通しを持っている保育施設は多くないのが現状です。

保育施設は社会機能維持のための重要なインフラであるため、水害で被災しても保育業務を早期に再開することが社会や地域から求められます。しかし、この再開の過程は決して順調ではなく、各施設において保育者が復旧方法を模索しながら厳しい条件下で保育を継続している状態です。このような現状を改善するため、本研究では、被災事例における知見の体系化、保護者との協力体制構築のための方策の検討を通して、保育施設が水害を乗り越えていくための保育施設・保護者の対応モデルを構築することを目指しています。

具体的には被災事例のヒアリング・実地調査および避難を経験した保護者を対象にしたヒアリング・質問紙調査を予定しています。



Q2 研究計画調書作成にあたって、工夫された点などアドバイスをお願いします。

申請書を書く際に、「研究計画調書作成に当たって留意すること」が示されていると思います。これに忠実に、コンパクトに書くことを意識しました（本当に当たり前のことでこんなことを書いて恐縮です…）。私は文章を書いていると話が逸れていってしまうことが多々あるので、核心をなす問いは何か、そこから話が逸れていないかを繰り返し見直しました。

また、ありがたいことに何人かの先生に申請書をチェックしていただくことができました。自分ではわかっているつ

もりで書いているけれど、説明不足な点や、アピールしたいけれど言語化しきれていない点について指摘をいただきました。このアドバイスが非常に大きかったと感じています。

Q 3 研究の進捗はいかがですか？今後の展望についてお聞かせください。

被災事例のヒアリング・実地調査および避難を経験した保護者を対象にしたヒアリング・質問紙調査を予定しており、現在保護者対象の質問紙調査を行っているところです。これまで保育施設のヒアリングに取り組んできて、保育者視点の災害対応について考えてきましたが、保護者が災害発生時にとっていた対応について知ること、保育施設が保護者に向けてどのような発信をしていけばよいのか、検討していきたいと思っています。

こども心理学部 野中 俊介

Q 1 採択された研究テーマと概要、具体的研究方法や研究計画について教えてください。

2023 年度に若手研究として採択された研究のテーマは、「ひきこもり機能の個人差が生活の質や社会的交流行動の改善プロセスに及ぼす影響」です。これまでの研究から発展させて引き続き行う研究であり、ひきこもりが維持されている背景には、ひきこもり状態にある人自身にとってどのような機能（意味）があるのかということを示す、「ひきこもり機能」に焦点を当てた研究です。

これまでの研究において、ひきこもり機能をアセスメントする方法を検討してきましたが、この研究においてはさらに「生きづらさ」（生活の質）にも着目して、ひきこもり機能とその変化が生活の質にどのように影響するのかを明らかにすることを目的としています。ひきこもり状態を経験した人を対象として、回顧的な半構造化面接や質問紙調査、長期的な追跡調査を予定しています。



Q 2 研究計画調書作成にあたって、工夫された点などアドバイスをお願いします。

研究計画調書の作成においては、他の先生方や諸先輩方からのアドバイスやご意見もふまえながら自分なりに理解して工夫しようとしてきました。作成にあたり特に意図してきたことは、たとえば、申請課題の特徴を明瞭にするために、既存の研究において不十分であると考えられるポイントと対比させながら記述すること、これまでの成果を通して研究者としての自分の強みを主張することなどです。また、より具体的な点としては、1 ページ目に関連テーマにおける申請課題の位置づけを図示することによって、関連テーマの研究発展に寄与する申請課題の特徴を読み取りやすくすることを意図しました。また、研究方法において研究全体のスケジュールを図示することによって具体的に申請課題の達成可能性をアピールすることを意図して作成しました。

その他、以前に申請したものを後から振り返ってみると、申請内容の研究意義をアピールしていても、研究計画が「絵に描いた餅」ではなく十分に達成可能であることをアピールすることが不足していた点かもしれないと思に至りました。そのため、たとえば本申請においては、関連研究においてネックになりがちと言われている研究フィールドを確保していることや、関連団体において継続的に社会貢献活動などを行っていることなどを記述することを通して、研究計画が十分に達成できることをアピールするように心がけました。

Q 3 研究の進捗はいかがですか？今後の展望についてお聞かせください。

計画通り、現在は1つ目の研究を実施するための準備を進めています。たとえば、関連学会や関連雑誌における研究動向の確認や、具体的な手続きを精緻化するためのチェックを進めています。当初予定していたよりも、前提の1つとする論文の査読審査に大幅に時間がかかっていることが懸念材料ですが、そのなかで指摘された研究手続きに関する内容を今後の研究においては可能な限りクリアできるような手続きを検討するなど、研究方法の精緻化に生かしていきたいと考えています。

また、ひきこもりの予防に関する研究や、ステレオタイプやスティグマのようなより社会心理学的な知見からみた生きづらさを減少させるための研究、他国との社会文化的な差異に焦点を当てた研究なども実施したいと考えています。

Q 1 採択された研究テーマと概要, 具体的研究方法や研究計画について教えてください。

幼稚園の英語イマージョンクラスにおいて幼児の英語発話を促す要因と環境とは、というテーマを研究しています。近年、日本において英語教育の低年齢化が進んでおり、2020年度からは全国の小学校で3年生から外国語活動が実施され、5年生から外国語が教科化されました。英語教育の早期化は他国でも見られ、ヨーロッパの国々では幼児期からの実施が進んでいます。この流れは今後日本においても加速すると考えられます。幼児期の英語教育の成果を図る指標の一つに子どもの英語発話の内容と頻度がありますが、今までの研究は、子どもの英語発話を促進する要因と環境について十分に扱ってきませんでした。本研究の目的は、幼稚園の英語イマージョンクラスにおいて、幼児の英語発話を促す要因は何なのか、そのためにはどのような環境が整っていれば良いのかを明らかにすることです。先行研究を洗い出す作業と並行して現場でデータを収集し、国内外で学会発表もしたいと考えています。



Q 2 研究計画調書作成にあたって, 工夫された点などアドバイスをお願いします。

研究計画調書作成にあたっては、専門外の方でもわかるように、噛み砕いて説明することを意識しました。また、今まで自分が実施してきた研究との関連性についても可能な限り明記しました。書き終えた後は、同僚の先生方をお願いして読んでいただき、意見を頂戴し、研究計画調書を推敲しました。当たり前のことを申しあげて恐縮ですが、私にとっては書いた後に少し間を開けて、もう一度読んでみたこともとても良かった気が致します。こうすることにより、フレッシュな視点を得ることができ、最初は気づけなかった改善点が見えてきたからです。

Q 3 研究の進捗はいかがですか? 今後の展望についてお聞かせください。

幾つかの手順を踏んで研究協力を依頼していた施設や関係者から無事研究の承諾をいただくことができ、可能な限り現場に行き観察をし、データ収集をしています。早期英語教育についての是非は研究者の間でも見解が分かれるところですが、導入が成功するためには、教育の質が高く、十分なインプット量があり、適切な教授法でなければならないことは意見が一致するところですが。データを分析し、幼児の英語発話を促す要因と環境を明らかにすることで、現場の先生方に幼児英語指導法についてのより詳しい知識を与え、子どもに質の高い教育を提供する一助になれば、と思っています。



英語イマージョンクラスにおけるこどもたちの制作物 (写真提供: 橋元知子先生)

編集後記

今年度最初の研究推進ニュースレターをお届けします。研究推進委員会は、昨年度に引き続き小林久美委員長をはじめ、井梅由美子委員、石橋と、新たに、小林寛子委員、橋元知子委員が加わった5名、そして陪席に佐久間さん、福本さんの計8名で運営しております。

本号の発行にあたり、ご多忙中にも拘らず、ご執筆を引き受けいただきました先生方に、委員一同心より御礼申し上げます。どうぞご味読のほど、よろしくお願い申し上げます。